

軽蔑された翻訳

三木清

青空文庫

我々は我々の書いたものを互にもつと読むようにしたいと思う。私は必ずしもそれを尊重せよというのではない。正直に云つて、日本の学界の水準は西洋の学界の水準よりも低いことを認めねばならぬ。そしてものがその本質的な価値に相応して尊重されるということとは正しいことであり、善いことである。私の求めているのは親切である。日本人は日本人の書いたものを互にもつと親切に読むようにしたいと思う。我々は互に他の人のものをもつと率直に理解し、もつと親切に批評するようにしなければならぬ。そうしてこそ我々の間に文化の共通な、広い地盤が作られ、その上に初めて我々の独自の文化が花を開くことも出来るのである。

然るに我が国の学者は少くとも同国人のものをあまり読まなさ過ぎるのではないか。

これには色々な理由があろう。しかしその一つが日本の学者の多くは自分の国の言葉を愛しないというところにあるのは確かかなように見える。言葉を愛することを知らない者に好い文章の書ける筈がない。悪文、拙文は我々の間では学者にとつて当然なことであると思われる。あの人は学者にしては文章がうまい。などと平気で語られているのである。然るに若し言葉と思想とが離すことのできぬ内面的関係をもつているとすれば、このような事実は、少くとも一面に於いては我が国の学者に自分自身の思想を求め、形作ろうとする衝動と熱意とが欠けているということの証

左でなければならぬ。ひとは自分自身の思想を求め、形作るとき、自分自身の言葉を求め、形作る。

歴史がこのことを証明している。近代のドイツ哲学はギリシア哲学に比肩し得べき偉大な世界的事実である。このようなドイツ哲学の発展の発端をなしたのはライプニッツであったが、彼はその当時すさまじい勢でこの国へ侵入して来たフランス語に対して、また伝統的なラテン語に対して、母国語の価値に関するいくつかの文章を書いてドイツ人に警告し、ドイツ語をラテン語に代えて学術語として使用することを主張した。彼はドイツ語で哲学上の論文を書いた最初の人に属している。そのほか、彼はローマ法をドイツ語に翻訳してしまうことの必要を力説した。またヘーゲル

が自分の思想を出来るだけ純粹なドイツ語で表現することに努め、ラテン語から来た言葉をさえ避け、寧ろ俗語むしを活用しようとしたのは有名な事実である。このようにして、全くドイツ固有な言葉の意味を有するかの「ガイスト」（精神）の哲学が完成されるようになったのである。

哲学者ライプニッツもその必要を大いに認めた翻訳というものの意味は、外国語を知らない者にその思想を伝達することに尽きるのではない。思想と言葉とが密接に結合しているものである限り、外国の思想は我が国語をもつて表現されるとき、既にもはや単に外国の思想ではなくなっているのである。意味の転化が既にそこに行われている。このときおのずから外国の思想は単に外国

の思想であることをやめて、我々のものとして発展することの出来る一般的な基礎が与えられるのである。翻訳の重要な意味はここにある。このことを考えるならば、翻訳でものを読むということとは学問する者にとって恥辱でないばかりか、必要でさえあることが分る。

支那や日本に於ける仏教の発達の場合を見よ。この独自の発達は原典ではなく、却^{かえ}つて翻訳書の基礎の上に行われたのである。或いはポエチウスによるアリストテレスのラテン訳が中世のスコラ哲学の発展に与えた影響、或いは聖書のルツテル訳がドイツ文化の発展に及ぼした影響などを想い起すがよい。何でも原書で読まねばならぬと思ひ込んでいることが如何^{いか}に無意味であるかが分

るであらう。

然るに日本の学者の多くは何故かそのように思い込んで
 いるのである。彼等は翻訳書を軽蔑することをもつて学者の誇であるか
 のように考えている。なるほど、どのような翻訳も、翻訳たるの
 性質上、不正確、不精密を免れない。誤訳なども多い。しかしこ
 のような欠点は語学者や註釈学者にとっては最も重大な性質のも
 のであつて、自分で考えることを本当に知っている者にとっては
 何等妨害とならないのみか、そのような不正確、不精密、誤訳か
 ら却つて面白い独創的な思想が引出されている場合さえあるので
 ある。これは少し綿密に思想の歴史を研究した人には容易に認め
 られ得ることである。

私は固^{もと}より誤訳の出現を希望する者ではない。寧ろ正反対である。しかし私は今日学問する人が、先ずもつと我々同志の書いたものに注意すると共に、次に日本語になつた翻譯書をもつと利用することを希望せずにはいられない。原書癖にとらわれて翻譯物を輕蔑し、折角相当な翻譯が出てゐるのに読まないで損をしている学徒も多い。どんなものでも原書で読もうとしてゐるために、自分で考える余裕を奪われている人もある。なんと云つても翻譯なら速く読める、その上翻譯書はその内容の要領を掴^{つか}む点から云つても便利である。原書癖を矯正することによつて得られる利益は想像されるよりもずっと大きいだろうと思う。我々はまだまだ外国思想を移植する必要がある。けれどもこのことと原書癖とは

区別されねばならぬ。翻訳書は学者以外の者の読むものであるかのように考えている偏見をなくすることが必要であると思う。

青空文庫情報

底本：「読書と人生」新潮文庫、新潮社

1974（昭和49）年10月30日発行

1986（昭和61）年9月30日20刷

初出：「文芸春秋」

1931（昭和6）年9月

入力：Juki

校正：小林繁雄

2010年1月5日作成

2010年1月19日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

軽蔑された翻訳

三木清

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>